

## 「未来」を学び去ること

西亮太

はじめに

「未曾有」、「歴史的」、「想定外」……。三月一日の地震とそれにもなう津波、原子力発電所での事故に関する報道にこれら断絶を喧伝する文句がおどる。目の前にある現在の現実を断絶によるものと見なすか連続と捉えるか、それは今後の「未来」をどう構想するにかかわっている。震災と原発事故の被災地の「未来」は、「復興」なのか「再生」なのか「開発」なのか、あるいはまた別様のものとなるのか。これは喫緊の課題であり、同時に性急な答えを受け付けない問いでもある。過去と現在の問題について、エドワード・サイードは『文化と帝国主義』の冒頭で次のように述べている。

過去に訴えることは、現在を解釈するときのもっとも平凡な戦略のひとつである。過去へのそういった訴えが活性化させるのは、過去に起こったことや過去とは何であったのかに對する反論だけでなく、過去に對する不確実さである。すなわち、過去は本当に過ぎ去り、決着がついたのか、あるいは過去は形をかえておそらく今も続いているのか。この問題が活性化させるのはありとあらゆる議論である——影響についての、非難と判断評価についての、そして現在の現実と未来のプライオリティについての。(Saïd: 1993, 3)

こういった議論の中でサイードが取る立場は明確だ。再び本

人の述べるところによれば、それは「わたしたちが過去の過去たるゆえんを完璧に認識しなければならぬときですら、過去を現在から隔離する公正な手段などない」(Tipton) という立場である。単純な「断絶」あるいは完全な「連続」ではなく、過去と現在はい互いに絡まりあっている、というサイードの慧眼に深く首肯しつつも、私は、それではその認識から導き出されるかもしれない「未来」とは、そのプライオリティとはいかなるものなのか、と問わずにはいられない。本論者では、「未来」を構想する可能性の条件を、サイードの批評を経由していくつかのテキストを読みつつ考察する。それはレイモンド・ウィリアムズの「学び去ること」という語彙に関するサイードの態度および、フレドリック・ジェイムソンとの距離の問題となるだろう。だがその前に、「現在」を読みとかなければならない。それは「メディアとしての原子力」が担っていた「進歩」あるいは「成長」そして「未来」というイメージが、いかに原子力そのものの危険性を覆い隠し、さらにはそれがいかに思考の閉域として機能していたか、を確認する作業となる。この閉域の中で構想された「未来」こそが、今、目の前に広がる「現在」である。

## 「成長」・「未来」

——メディアとしての原子力がカヴァーするもの

アイゼンハワー大統領の「平和のための原子力」(1953)と呼ばれるスピーチは、原子力の利用法を「兵器」から発電エネルギーへ転換すべしとのアメリカの姿勢を打ち出すのみに留まらず、その3ヵ月後の第五福竜丸被爆事件を待つまでもなく、「平和利用」なる言説が覆い隠しつつ担っていた欲望を明るみに出すものであった。

アメリカ合衆国は、戦争目的の原子力物質の単純な削減あるいは廃絶以上のことを目指しております。

この武器を兵士の手から取り上げるだけでは十分ではないのです。こういった兵器は、軍事的な外装を剥ぎ取り平和の技術／芸術 (the art of peace) に適用することのできる人物の手にゆだねられなければならないのです。

アメリカ合衆国は、もし原子力による軍備増強という恐るべき潮流を逆の方向に向かわせることができれば、この最も強大な破壊的力はすべての人類の利益に供する偉大な恵みへと発展させられうる、ということを知っているのです。

(Eisenhower)

ここでの「平和」は、原子力の適切な利用でもって（ソ連ではなく）アメリカによってこそ獲得されるべきものとされ、「すべての人類の利益に供する偉大な恵み」をもたらすものとされている。このことは、核兵器によって破壊されてしまうものが「世代から世代へと受け継がれてきたかけがえのない人類の遺産」であり、また「人類が野蛮な状態から秩序を経て、公正、そして正義へと上昇する古来の苦闘の道筋」(ibid.)であると想定されている点にも見出せる。つまり、少なくともこのスピーチ内では、「平和」とは原子力の適切な「利用」と切り離せないものとされ、「核兵器」およびそれによる破壊の対概念として扱われているのだ。「平和」とは、人類の上昇的發展を支えるものであり、また、その上に立脚した「未来」そのものであり、それは原子力の平和利用によってのみ、そしてアメリカによってのみ成し遂げられる、というわけだ。「人類の未来」を独我論的に保持しようとするこのアメリカの姿勢は、ソ連との核兵器開発のいちごっこに先んじて、平和利用という大義のもとに原子力そのものの危険性を利用法の問題にすり替え、その正当性を声高に宣言するものであったと言える。そういった意味で「原子力」とは、政治的思惑と単線的な発展観およびその先にある未来を流通させるメディアであったと考えら

れるだろう。

だがメディアとしての「原子力」は、アメリカの外交政策内だけでなく日本への原子力発電所導入前史にあたる一九五〇年代日本の市民運動の中にも見出せる。原子力にかかわる当時の言説すべてを明らかにすることは本稿の目的ではないが、明らかに反米と思われる市民運動によるテキストの中に、「未来」を映し出すメディアとしての「原子力」を確認しておきたい。

一九五五年、前年の第五福竜丸のビキニ環礁での被爆事件に揺られ、反米・反核運動が盛り上がる中、『ルポルタージュシリーズ・日本の証言第一巻・原子力』が「現在の会」から刊行されている。これは安部公房や後には上野英信の関わった、アバングャルド文学運動と市民運動の交点にあたる運動（鳥羽、63-71）から立ち上げられたシリーズであった。反米親ソ路線を明確に打ち出す本テキストにはしかし「現代の錬金術」（第一章表題）や「一本のマキが二本になってでてくる」(24)といった表現がおどる。しかも、最初に原子炉を完成させたソ連を評価し、返す刀で原子力の軍事利用路線をひた走るアメリカを批判した後で、このテキストは最後に次のように締めくくるのだ。

原子力が全世界の人間のものになり、幸福な平和な世界がく

るまでには、まだまだ困難な忍耐強い仕事が必要です。しかし、その日はもう遠くはないのです。(68)

「全世界の人間」、「幸福」、「平和」、そして「その日」。ここには「平和のための原子力」スピーチと同じ言葉が親ソになっただけで、鏡写しのごとく表れている。また、肯定的にのみ用いられる「現代の錬金術」という呼称は、原子力を「太陽」と呼び原子力発電所の導入に尽力した正力松太郎(有馬、36頁)との敵対的共犯関係をもうかがわせる。だがメディアとしての原子力の担った役割はこれだけではない。原子力は世界規模の覇権争いだけではなく、戦後日本が成長していく文字通り原動力を提供するものであったし、メディアとしても日本の「成長」のイメージを提供し続けていたと考えられるのだ。

とはいえ、日本において原子力が「成長」のイメージを担い始めたのは比較的最近のことだと考えられている。開沼は一九四五年までの日本の政策を「外へのコロナイゼーション」と呼び、その際に採用された「総力戦体制がそれまでにない地方を国家のシステムへ組み込」むことになり、その延長線上で「成長を望むムラの欲望」を掻き立てつつなされたものとして「内へのコロナイゼーション」を位置付ける(325-328)。これは少々図式的に過ぎるとも思われるが、対外膨張と国内政策を結

びつける視点は有用だ。ここに、戦後に限らず、さらには総力戦体制以前から、すでに東北は台湾および朝鮮半島と並び、コマや労働力の供給地であった、とする小熊の指摘(126-139)を挿入することで、「成長」が内外への植民地的営為の謂いとなっていることを確認できる。この延長線上に電力供給という役割が重なるのが、戦後成長の時期であったのであり、その中で地方によって「自発的に」(開沼)欲望されていたのが原子力発電所であった、ということになる。この点を踏まえれば、今回の震災による「危機」で明らかになったのは、「原子力」に重ねあわされるかたちで追求されてきた「成長」とその先の「未来」が、誰もが否定し得ないようなポジティブなイメージをオブセクシブに身にまといながら必至で抑圧していたものであった、と言えるだろう。それは、原子力発電所に関していえば、放射能の危険性のみならず「議論なし、思想なし」(高木、33頁)のさまざまな研究状況であり、「自分が生命体であることの証である「生理」すらも捨て去ることが強制されている」(堀江、31頁)原発の下請け労働者たちの存在であったし、政策面では「地方」を取り込みつつ搾取し食料・労働力・電気エネルギーの供給地の地位に固定してきたという歴史的事実であった。強烈な「危機」がもたらしたのは「未曾有」や「想定外」という形容とは裏腹に、歴史的連続性の上で

ほとんど認識できないような形で続けられてきた「日常」の、すなわち「現在」の孕む構造的暴力そのものであったのだ。

しかしながら、困難は現在において「断絶」を強調する立場ほど、依然変わらず「成長」神話を抱擁し続けその先に「未来」を見ようとし、逆に歴史的連続性を強調すれば、同時にこれまでの考え方からの脱却を前提にこの先を構想しなければならぬ、というねじれにある。しかも、震災の被災地は後者の立場をとろうとしても、前者の枠組みで思考する政府から援助資金を引き出さなければならぬ。このダブルバインドの渦中にあるのは身動きがとれないどころか思考停止に陥る危険さえあるかもしれない。「未来」を描くためには、たとえ迂遠と思われても、「未来」を構想する条件から整理していかなければならない。

### 物語りとしての「未来」、読むこと

ここまで、冒頭に挙げたサイードの言葉を指針として、「過去」やその「未来」および「成長」の露出したものとして「現在の現実」を（多分に簡便で粗雑とも言える程度ではあるが）概観してきた。ではそこから「未来」が描き出せるようになってきたかと言えば、その応えは「否」でしかない。そもそも、単純

的時間観にせよ、それとは別様の時間観を採用するにせよ、

「未来」とは「現在」において成される表象行為によるものである。「未来」について語ろうとするのであれば、それは「私は「現在」を語らなければならない」という要請に行き当たる。これは「私」の立ち位置に関わる問いと、カッコつきの「現在」という内容および形式の問題とに分節化できるのだが、ここでは表象された「現在」の、その表象の過程あるいはイデオロギーの機能という問題とも折り合いをつけなければならない。この複雑な問題を理解するために、以下ではまず、この「現在」の問題を、フレドリック・ジェイムソンの「形式」と「内容」に関する知見を用いて説明し、次に、そこで無視されている「私」の問題を接続したい。

ジェイムソンは『モダニスト・ペーパーズ』の「イントロダクション」で、自身の前著（『近代という不思議』）に対する「歴史還元論」との誤解を解き、自身の方法論を説明すべく、「形式」と「内容」の二項対立への挑戦を試みる。ここでのジェイムソンの洞察は、「二項対立への」対立点の模索は、なんとかして当初の閉域あるいはダブルバインドの外部に出るということ、そもそもそれははじめから志向しない限り、それはあきらかに機械的あるいは依存的手順以外の何ものでもな「くなくなってしまうとした点、そして、なんとかして「テーゼとアンチテ

ーゼが「総合」へと至ると想定される、旧態然としつつも未だ強力な弁証法のカリカチュア」に因らない「予測不可能な方法においてそれを超越する」戦略を考案しなければならぬ (xi) とした点、さらにはそのためには「形式や内容といった」術語を退けるのではなく、それらを複雑化する (xiii) 必要がある、と説いた点にある。ジェイムソンは「形式」と「内容」を組み合わせ、「内容の内容 (content of content)」「内容の形式 (form of content)」「形式の形式 (form of form)」そして「形式の内容 (content of form)」という四つのパターンを作る。ここではそれらの位置取りを、数学で用いられる二次元の直交座標系で図式的に説明する。x 軸と y 軸それぞれのプラス方向 (x 軸なら右方向、y 軸なら上方向) に「内容」を、マイナス方向に「形式」を割り振ると、座標の右上から反時計回りに第一〜第四象限において、先程の四つの組み合わせを位置付けることができる。第一象限 (x = content, y = content) には「内容の内容」が、第二象限 (x = form, y = content) には「内容の形式」といった具合である。ジェイムソンのテキストでは直交座標ではなく表で示されているが、本稿では便宜的に座標で表現した。したがってここでのそれぞれの軸の元来の役割であるプラスとマイナスのイメージは、「形式」や「内容」それぞれの肯定的／否定的価値判断とは符合しない。

さて、まずジェイムソンが指摘するのは第一象限に位置する、「内容の内容」を読み解こうとする姿勢である。だが、そこで読み取ろうとされているものは、カントの「物それ自体」に似た、未だ形式を持たず表現不可能な「テクストの生起する社会的歴史的現実」(xv) である。この「物それ自体」たる「内容の内容」に表象によって形式が与えられたのが、第二象限に位置付けられる「内容の形式」である。表現不可能なものが表象の過程を経て現れるのだから、「内容の形式」とはイデオロギーに「取り囲まれたもの」(xvi) と言ったこともできる。このイデオロギーの働き (形式化) のみを純化させて抽出するのが第三象限に位置する「形式の形式」である。これは「ある種の自律」を確保し、「旧い内容のイデオロギー的形式を何らかのあたりで中立化あるいは括弧入れした〔……〕純粋な形式構造」(xvii) とされる。具体的にはある時期のモダニズムやフォルマリスト的な姿勢を示している。しかしながら、「われわれは形式化による否定を用いても、われわれが世界内存在 (being-in-the-world) であることからは逃れられない」(ibid) ののであるから、そういった抽象化はすべからず失敗する、とジェイムソンは言う。この「形式の形式」の内的矛盾から、「われわれは、四つ目の視点すなわち「形式の内容」そのものの中にわれわれが入り込んでいるのを見出すことになる」(ibid) と。

この図式を（ジェイムソンはあまり明示的には語っていないように思われるが）テキストを読む立場から捉えなおしてみれば、目の前にある「テキスト」は基本的に第二象限にあたる

「内容の形式」である。そこにイデオロギーや表象作用を読み込み、あるいはテキストの内的世界の精読によって抽象化したのが理論、すなわち「形式の形式」であり、その「純粋な形式」を標榜する理論の「形式の内容」を読み込むのが第四象限に位置する者すなわち「われわれ」である、ということになるだろう。フロイト論的に言い換えれば、目の前にある「夢」は「内容の形式」であり、「夢の作業」（先程の定式ではイデオロギー）から遡及的に見出されるのが無意識すなわち「内容の内容」であり、それを抽象化・理論化した精神分析理論が「形式の形式」ということになる。そして、「われわれ」はその精神分析理論に内在する「形式の内容」（たとえばフロイトにとつての「女」の問題）を読み取る、ということになるだろう。これは「理論」なるものの「内容」を読み取るという解釈の解釈、すなわちメタ理論的な立場を示したものであり、その意味では非常に重要な視点だと言える。本論考の意図に則して換言すれば、「目の前にある「現在」は「物それ自体」の表象されたものでしかない、したがってそこにあるイデオロギー（「断絶」か「連続」か）を読み取る必要があるのだが、それを読み込む

という行為にすら意味内容（電力業界での利権保持など）があることを読み解かなければならない」とまとめることができるだろう。

このジェイムソンの立ち位置、すなわち「われわれ」の立ち位置はメタ理論的それであり、一見すると非常に洞察に満ちた視点にも思える。だが、この点にこそジェイムソンの、そして「われわれ」の盲目の瞬間がある。「われわれ」は純粋形式を標榜する「形式の形式」に「内容」を読み取る立場にあるのだから、言うなれば「（形式の）形式の内容」を洞察する位置取りだと言えるのだが、ではその「われわれ」の営為に偏向がないということをも、つまり「われわれ」が読み取った「（形式の）形式の内容」の「内容」は、いかにして担保されるのだろうか。換言すると、先程のジェイムソンの定式をジェイムソンに突きつけて「世界内存在からは逃れられない」と言うことができるのだ。しかしそうなると、その通告を行う立場は世界内存在であり……と、「内容」と「形式」がメタに折り重なっていく永遠の鏡写しの世界に踏み込むことになってしまう。二次元の直交座標を三次元、あるいは四次元にしていったところで、大きな意味はない。では、ジェイムソンが目指した「外部」あるいは「予測不可能な形での超越」はありえないのだろうか。もしくは、「われわれ」の偏向を指摘してくれる審級はないの

だろうか。

もちろん、ジェイムソンの枠組みに自身が世界に内在しているという認識がないわけではない。だがここでは、サイードの議論を比較対象とし、両者の距離をサイードに寄り添うかたちで考えてみたい。両者を重ね合わせようとすれば、第三象限の「形式の形式」が「理論」となり、第四象限の「形式の内容」とはすぐれてサイード的な意味で「批評」に、そしてそれを担う「われわれ」は「批評家」となるように思われる。だが急いで補足しなければならないのだが、ここでの「われわれ」あるいはジェイムソンの立場がそのまま等号でサイード的「批評家」に連結される、ということではない。そこには大きな差異があるのだ。

テキストと批評のあいだ

### ——歴史、文学（批評）、そして地理

サイードにとって「理論」と「批評」は全く異なるものである。『世界・テキスト・批評家』と題された著作で、サイードは当時のアメリカの文学者たちの自己完結的で専門家然とした態度を秘教的で実際の世界から遊離したものととして批判し、彼らの「宗教批評」とは異なるものとして、自身の態度を「テク

ストとは世界内存在であり〔……〕したがって社会的世界の人間の生の、そしてもちろん、そのテキストが位置付けられ解釈される歴史的瞬間の一部なのだ」と説明し、それを「世俗批評」と位置付けた(5)。これはもちろん、単純にサイード自身のテキスト観を表明するだけではなく、「宗教批評」を行う文学者たちのテキスト観が現実世界から自律したものなのではない、との批判でもある。つまり、テキストの自律性を自明視する理論的立場そのものの「内容」を、サイードは指摘しているのだ。これは先程のジェイムソンの図式から言い換えれば、第四象限（「批評」）から第三象限（「理論」）に向けられた視線だと言える。ここにおいて、ではその「批評」の正当性はいかにして担保されるのか、という先程の問題が再浮上してくることになるが、結論を先取りすると、サイードにとってその担保は存在しない。とはいえ、これは「批評」および「批評家」の政治性を無視することで知らぬ存ぜぬを決め込んだり、あるいは自身の政治性を固定してその説明を回避したり、という態度ではない。この問題に対するサイードの立場は表題にすでに示されているのだ。

『世界・テキスト・批評家』。第三象限にあたる「理論」が見あたらないにもかかわらず、本書の主要なテーマは「理論」論である。それはテキストと批評家のあいだにある。ここでのサ



イードの立場において重要なのは、第三象限と第四象限の区分をなくすことで「批評」が純然たる「形式の形式」も、そしてそこに「内容」を読み取る自律したメタ的視点のどちらも保持しえなくなる点にある。つまり、「理論」を自律的だとする姿勢、あるいはその「理論」の自律性を虚偽とする立場の自律性は、端的に不可能となるのだ。とはいえ、自律性への疑義はサイドにおいては「政治的・反逆行為」(233)へと変換され、そこに読み取られる「批評的意識」(kritik)が強調される。したがって「批評家」とはこの「批評的意識」を備えた者ということになる(ジェイムソンが第三象限から第四象限への移行を、ある種内在的で非意識的な自動的動きとして描写していたことに留意されたい)。言い換えれば「批評家」たる「私」は、「テキスト」を読むが「理論」を読むが、「内容」すなわち何かしらのイデオロギーや表象の作業から超然と身を引き離すことができないということを自覚せざるを得ないのだ。

前節で既に指摘しておいた「私」の問題がここに接続される。自身が世界に内在しているとの認識はジェイムソンにもサイドにも見出せる。しかしながらそこには(少なくともサイドの側から考えると)大きな差異がある。まずはジェイムソンの認識を確認してみたい。ジェイムソンは『政治的無意識』の序文で自身の論理的手法を次のように述べる。テキストとは「常

に既に読まれたものである」のだから「われわれの研究対象はテキストそのものではなく解釈、すなわちわれわれがそのテキストと対峙しそれを我がものとしようとする解釈なのだ」(20)、と。これは、われわれの解釈そのものがわれわれの研究対象であるとの言明であり、ここには先程の図式よりも少々複雑な、自己言及的態度を持つ「われわれ」の位置づけを見出せる。だがこの枠組みでは、そういった「われわれ」のプロジェクトを立ち上げようとしているような、言い方をかえれば序文冒頭の「常に歴史化せよ!」を「唯一、超歴史的とも言えそうな命令」と看做そうとしている、「私」は考察されえない。とはいえ、ジェイムソンは本書の特に「結論」において、自身の依拠するマルクス主義の書き換えを行おうとしているのだから、固定的な「理論」の信奉者にあたるとは言えない。ジェイムソンはマルクス主義特有の問題点を、イデオロギー批評とユートピア批評の間の緊張関係に見出し、これを同時に行うことを提案する。ユートピアの中にイデオロギーを見出すのなら、マルクス主義はその逆もまた同時に行われなければならない、と(286)。しかしながら、サイドはその点にこそジェイムソンの閉域を見出すのだ。

サイドがジェイムソンに向ける批判は、ジェイムソンが変革を持ち込みつつも手放そうとしないマルクス主義の、単線的

発展的な時間意識とそれを行う「われわれ」にある。ジェイムソンの時間意識あるいは歴史観はいくつかの角度から批判することが可能であろうが、ここではそういった歴史あるいは時間を論じるときの人称に注目してみたい。すでに示唆してきたように、ジェイムソンは『政治的無意識』のプロジェクトを論じる際、一貫して一人称の複数を用い続けている。そこには「個人主体が、彼あるいは彼女の階級によって規定されてしまっている」ということに何らかの形で意識的になる瞬間」というマルクス主義的な最終段階を「神話」と退け(273)つつ、そういった「透明な認識に到達できるのは〔……〕マルクス主義のシステム内では集団的統一のみである」(274)とのジェイムソンの認識が窺える。この大前提があればこそ、ジェイムソンは集団を基盤にしてマルクス主義の否定的弁証法と肯定的解釈学を対立ではなく相補的なものと考えることができなのだ。だが

サイドは「歴史、文学、地理」と題されたエッセイの中で、それまでのジェイムソンの議論は評価しつつも、この結論を「甘美で理想的な構造でしかなく、我々の時代の騒乱に則した」というよりは中世的でスコラ的な響きを持っている」(471)と退けている。では歴史と文学的解釈との関係を考察してきたジェイムソンの洞察のどこに死角があったとサイドが考えているかといえば、それはまさしくその洞察の大前提たる「われわ

れ」の閉域だと思われる。

## 「地理」と「回想の感情構造」

### ——「自伝的」であること

サイドがジェイムソンに欠けていると考えているものは先ほどのエッセイの中では「地理」と呼ばれている。具体的にはレイモンド・ウィリアムズの『都会と田舎』が切り開いた地平、すなわち都会と田舎の関係を「二つの世界、すなわち二つの地理的実体を区別するところから」(468)考察を始める、という問題設定だ。だが興味深いことに、『文化と帝国主義』ではここでジェイムソン批判と全く同じ手つきで今度はウィリアムズの『田舎と都会』の一五年前に書いた『文化と社会』が批判されているのだ。ここで、マルクス主義の影響を色濃く受けながらも「われわれ」と語るジェイムソンとウィリアムズの違いが本場に「地理」だけなのか、考えてみる必要がある。それはサイドの結んだウィリアムズ像における、一五年を挟んだ二つの著作の差異の問題へと帰着する。

『文化と社会』および『田舎と都会』は、どちらもある対象の意味の歴史の変遷を系譜的に考察し現代に至るといふ構造を持っている。また、どちらも結論部である「現代」の領域に入っ

て「われわれ」の「未来」について語る、という点で相通的であると言えるだろう。『文化と社会』は主に「文化」の概念がおよそ二世紀間でどのように変遷してきたかを論じている。ここでその詳細を述べることはできないが、重要なのは高山が論じるように、「文化」が社会や芸術といった観念とのかかわりから、「その抽象性・絶対性の故に、たやすく特定の「階級」の独占物となってしまう」(96)という、ウィリアムズの問題意識だろう。この文脈があるからこそ、「分裂をつくり出さずに多様性を獲得」(95)するコミュニティとそれを支える連帯を作り出していく必要があるとの未来のヴィジョンが結論部分で語られるのである。そしてそのためには「われわれは生き残っていく上での対価として、固有の支配的様式を学び去らなければならぬ」(336)、と。しかしサイドは『文化と帝国主義』の「物語りと社会空間」と題された章の中でウィリアムズのこの著作を「帝国主義の経験を全く扱っていない」(65)と強く批判している。言い換えればこの時点でのウィリアムズに「社会空間」の感覚すなわち「地理」がない、と批判しているのだ。

ここで『オリエンタリズム』の手法を説明したイントロダクションの末尾で、サイド自身のプロジェクトの到達点としてウィリアムズの先程の「学び去る」を挙げていることを思い出

してみよう。「[支配的文化様式としてのオリエンタリズムを克服できれば]われわれはレイモンド・ウィリアムズが「固有の支配的様式」を「学び去ること」と呼んだプロセスを多少なりとも前進したことになるだろう」と(23)。『文化と帝国主義』がサイドにとって『オリエンタリズム』の批判的続編であったこと、特に前作ではほとんど触れられていない被植民者側からの抵抗を描くものであることは、示唆的だろう。したがってここでサイドのウィリアムズ批判をサイドに引き戻して説明すれば、「われわれ」の名においてその「固有の支配的様式を学び去る」だけでは不十分だ、ということになる。端的に、「われわれ」の外を「書かない」のではなく「書けない」のだ、

なぜなら「地理」が欠けているから、ということになる。ここで『オリエンタリズム』は「西洋」と「東洋」について、つまり地理的区分に根ざして議論してはいないか、と反論を受けるかもしれない。だが『オリエンタリズム』での議論の力点は地理的実体としての「オリエンタ」あるいは「オクシデンタ」ではなく、西洋世界の想像力における心象地理としての「オリエンタ」なのであり、植民地主義的対外政策を可能にし、それによる変容を受けつつも政治的営為と絡み合ってきたオリエンタリズムであった、という点を思い起こせば、サイドのウィリアムズに向けつつ同時に自己言及的でもある批判的意図

は理解できるだろう。「われわれ」の名において「学び去る」だけでは書き得ない何かがあるのだ。

では「学び去る」というプロジェクトはどうやって先に進めるのだろうか。そのヒントはサイードの奇妙な記述にある。サイードは先程の「物語りと社会」で、ウィリアムズがあるインタビューの中で、『文化と社会』の中で帝国主義について書いていないという点を問い詰められ、「自身のウェールズ出身という経験が完全に失効していた」と応答する部分を記している(64)。これは何を意味しているのだろうか。(この章に限らず『文化と帝国主義』全体を通して、ウィリアムズの帝国主義に関する記述の欠落および周辺の扱いは、『田舎と都会』も含めて何度も批判されるのだが、本論ではその手前で、すなわち「歴史、文学、地理」の中でジェイムソンとの対比において『田舎と都会』が評価されているという事実に着目しよう。)それは「地理」だとされるが、これはサイード自身の『オリエンタリズム』から引き出した「われわれ」の問題と深く関わっていると私は考える。

『文化と社会』で見られなかったとサイードが考えている『田舎と都会』の特徴は、本論考の趣旨に沿って言えば、後者が優れて自伝的であり、それが結論部分の「未来」を語る部分に影響を及ぼしていると考えられる点にある。「ウェールズ出身で

あるという経験」がウィリアムズ自身の思考の枠組みとして前景化されているのだ。特にイントロダクションに見られる思考の枠組みとしての「個人的動機」(6)はウィリアムズのウェールズ出身であり都会と田舎の間を移動したという経験によるのだから、それは「個人的な地理的経験」と呼んでよからう。だがこれは認識における単純な地理的広がりのみを指しているのではない。青年期以前の「田舎」経験とそれ以降の「都会」での経験によって「地理」を獲得したのであれば、そこには必然的に子どもから成人にかけての「意識の成長と変化」(397)が刻印されているはずだ。つまり「かつて親密で内的に経験されていたもの」が「危機的な、変化する、外的に観察されたものに変化」(397)しているのであって、「現在」における視点とはこの変化を経たもの以外ではあり得ないのだ。さらに重要なことに、「田舎」と「都会」それぞれに振り分けられる性質が、認識の変容前後それぞれの描写と符合しているという点に、ウィリアムズは注意を促している(398)。つまり、「過去」を失われたものとして回想的に想起する感情構造と、「田舎」に向けられる視線が重ね合わされ、その符号においてこそ避及的に先ほどの変化を問題化しようとしている、と考えられるのだ。

実際に『田舎と都会』の主題が、連綿と続く地理的実体としてある地方とそれにまつわるイメージあるいは誤表象にあるの

ではなく、むしろ遡及的に想起され表象された「田舎」の変遷の考察においてその表象の「作業」を問題化していくことにあるのだから、本書末尾において、認識枠組みの変容を前提とした上で「田舎」と「過去」への憧憬の双方を同時に俎上に乗せるというウィリアムズの問題意識は当然の帰結である。ウィリアムズはこれを「回想の感情構造」と呼んでいるが(298)、私はこれを(サイードの議論を敷衍して)「地理」に接続できると考える。時間軸上の移動にまつわる語を、空間的配置の語と接続するのは、一見、誤謬とも思われるかもしれないが、ウィリアムズが前者を個人的な経験を起点に問題化しようとしており、サイードがウィリアムズの経験を強調する際に持ち出した語彙が後者なのであってしてみれば、両術語の距離はそれほど離れてはいないと考えても良いだろう。もちろん、二人の時間性の認識は完全に符合するものではないのだが、ここでは「回想の感情構造」と「地理」の交点が提示する、「現在」への介入の姿勢および、その起点としての「自伝的であること」の射程に注目したい。

さきほど、サイードの見出した『田舎と都会』の特徴が自伝的であると述べた。だがこの「自伝的」とは、懐古趣味的な憧憬に身を任せ固定的な「過去」を語るといふ姿勢を意味しているのではない。自身の遍歴を語り、最終的に「現在」の自己を

肯定あるいは強化するという身振りが「自伝」であるとするれば、ここで述べてきた「自伝的」とはそういった単線的時間観に裏打ちされた成長観を切り崩すものであり、同時に逆説的ではあるが「私」の中に閉じこもらない、正確には「私」の内部において自身の経験を完結できないということを引き受ける態度である。ウィリアムズは「現在」における分断/分業 (division) への介入を目指す自身の行為を「個人的な決断ではあるが、しかしして社会的行為である」と述べつつ、自身の身振りを、「形を成しつつひとを魅了する過去に対する別様の理解を通じ、現在と未来に到達する (gain) 方法の一つとして私自身の中および記録内の経験をゆっくりと追想/描き直し (retrace) しなければならなかった」(306)と説明している。『田舎と都会』に見出せる「自伝的」であることは、「追想」しつつその「過去」を「描き直し」す行為でもあり、同時に「現在と未来」に向かうものでもあるのだ。また、ここでの「社会」とは、『キーワード辞典』の筆致に従えば「コミュニティ」に接続される可能性のある「活動的」(395)なものであり、その「コミュニティ」とは「別様の諸関係を説明するための説得的な語であるかもしれない」(76)のだ。

大規模な地震災害と原子力発電所事故によって明らかになったのが、「成長」の名の下に営まれてきた「現在」の日常の構

造的暴力なのだとするならば、まずはその「現在」において自身の享受してきた「成長」を「私」の経験において語るところからはじめなければならない。それは「都会」で生まれ育った「私」と、「田舎」で生活してきた「私」にとって、全く別様の経験として、いわば分断として描き出されることになるが、いやだからこそ、その「私」たちを分断しつつ結び付けてきた、そしていまだ機能している「成長」が、「未来」が、明らかになるのだ。この分断された「私」の経験を語る行為が「社会的」であるのならば、その閉域においてはじめて逆説的に、「別様の諸関係」の可能性として「われわれ」が見出される。メディアとしての「原子力」に典型的に見出せる、ナショナル

な「成長」において立ち上げられる「われわれ」ではなく、そこで分断の経験を語る「私」たちにおいて逆説的に垣間見える「われわれ」でこそ、単線的で固定的な「過去・現在・未来」ではなく、分断された「複数の現在」に立脚した、「形を成しつつある過去」を見出し得る可能性があるのだ。「未来」なるものがなんであれ、「世界そのもの」という意味での現在から超越してそれを考察することはできない。その「未来」は学び去られなければならない。しかし、この逆説的な「われわれ」において、「形をなしつつある過去」が構想できるのであれば、それこそが「未だ来たらざるもの」として、未来の名にふさわしいのではないだろうか。

## 註

(1) 「メディアとしての原子力」というアプローチは開沼の議論を参照している。とはいえ、本論の趣旨から離れてしまうが、開沼の議論が原子力発電所を考える上で十全な議論枠を提供しているわけではないこと、特に核をめぐる国際的文脈と、原子力発電所にとって不

可欠な存在としての労働者という視点が欠けていることは指摘しておきたい。  
(2) 例えば、震災後に書かれたあるエッセイで当時の首相であった中曾根は原発導入期の問題意識を「原子力と科学技術を発展させないと、日本は四等の農業国家になる」と回顧し、

〔今回の〕津波の被害はあまりに大きかった」とした上で、「日本の今後の発展とエネルギー事情を考えれば原発政策は持続しなければなりません」(20)と語っている。

- Eisenhower, Dwight D. "Atoms For Peace." The 470th Plenary Meeting of the United Nations General Assembly. 8 Dec. 1953. *IAEA. Org* <<http://www.iaea.org/About/history/speech.html>>
- Jameson, Fredrick. *The Modernist Papers*. London: Verso, 2007.
- . *The Political Unconscious*. 1981. Rpt. London: Routledge, 2010.
- Said, Edward. *Culture and Imperialism*. New York: Vintage, 1993.
- . "History, Literature and Geography" 1995. *Reflection on Exile and Other Essays*. Massachusetts: Harvard UP, 2000. (453-473).
- . *Orientalism*. 1978. New York: Vintage, 1978.
- . *The World, the Text, the Critic*. Massachusetts: Harvard UP, 1983.
- Williams, Raymond. *The Country and the City*. 1973. New York: Oxford UP, 1975.
- . *Culture and Society: 1780-1950*. 1958. Rpt. New York: Columbia UP, 1983.
- . *Key Words: A vocabulary of Culture and Society*. 1976. revised 1983. New York: Oxford UP, 1985.
- 有馬哲夫『原発・正力・CIA——機密文書で読む昭和裏面史』新潮社、二〇〇八。
- 小熊英二「近代日本を超える構想力」赤坂憲雄・小熊英二・山内明美『東北』再生』イースト・ナウ』二〇一七 (125-141)。
- 開沼博『「ノンナ」論——原子カマラはなぜ生まれたのか』青土社、二〇一七。
- 榎本恭介・池田龍雄(総)「現在の会編『ルポルタージュ』シリーズ・日本の証言第一巻：原子力』柏林書房、一九五五。
- 高木仁三郎『原発事故はなぜくりかえすのか』岩波書店、二〇〇〇。
- 高山智樹『レイキンド・ウィリアムズ——希望への手がかり』彩流社、二〇一〇。
- 鳥羽耕史『1950年代——「記録」の時代』河出書房新社、二〇一〇。
- 中曾根康弘「創始者」としては遺憾千万、再起には国民の理解必要」『アエラ臨時増刊号』(No. 22)：原発と日本人——100人の証言』朝日新聞出版、二〇一七 (59)。
- 堀江邦夫『原発ジミニー——被爆下請け労働者の記録(増補改訂版)』現代書館、二〇一七。